

心はいつも  
旅する  
加藤 九祚

# ユーラシアンホットライン

1999. 9. 1  
VOL. 17

## 《重要お知らせ》

トルコ大使館がトルコ地震被災者救援募金を募っています  
募金口座は：さくら銀行東京営業部 普通：9030004 「トルコ地震災害義援金」  
問合せ電話：03-3470-5131

## 第3回ユーラシアコミュニケーションフェスティバル開催 7/31-8/1

新潟県北魚沼郡6町村が建設した小出郷文化会館で3回目の“ユーラシア・コミュニケーション・フェス”が開催されました。地域住民やロータリークラブ、青年会議所とユーラシアンクラブが初めて実行委員会を作って実施。首都圏の留学生30数人がホームステイも経験し、理解、親睦促進を前面にしての開催となりました。今回は、地元新潟とユーラシアの係わりを、地勢学的、芸能文化的に理解してもらうことを目的に開催され、ホームステイもその一環として実施されました。実行委員会からは、今回の反省のため早期にクラブと協議したいとの声が届いています。来年も開催するかどうかは未定。  
参加した留学生及び留学生をホームステイで受入れたご家庭の感想を一部紹介します。

### ホームステイについての感想：ドルジ エルデニ/モンゴル人/電気通信大学

私は日本に来て6年間と言う長い日々が過ぎていきます。しかし、日本人の家に遊びに行く機会はほとんどありません。したがって知っている日本人と言えば仕事または学校に行っている人に限られてしまいます。

この意味で、新潟で、ユーラシア・コミュニケーション・フェスに参加することで、ホームステイができて大変いい経験をしたと思っています。小出町で、真夏の雪祭り、水力発電所のために作った12キロもあるトンネル、東洋一の水力発電所などと珍しいものたくさんみました。その上、あたたかい日本人の家族に日本について色々なことを教われ、大変おいしい料理をご馳走していただきました。

ちなみに、1億以上もある日本人の中で、なぜこの人と出会ったのでしょうかと考えるのは私の小さな楽しみでもあります。

このような大変良い経験を留学生の私たちにさせてくださったユーラシアンクラブ、ホームステイをさせてくださった家族に心から感謝を申し上げます。

最後に、ユーラシア・コミュニケーション・フェスティバルのような行事がたくさん行われることを願っています。

### 忘れ難い出会い：泳 諷敏/ダフル人/金沢大学

一種感謝的な心情には常にある忘れ難い出会いが包含されているかもしれない。

七月九日の午前、家で論文を書いている私は、意外にユーラシアンクラブから、日本在住のユーラシア各国の少数民族とのある交流会へ招く電話を受けた。初対話にもかかわらず、主任者大野遼さんの率直な話には私は一種親しみを感じた。それから私たち家族三人はこの小さな旅の到来を楽しんでいた。

七月三十一日九時に、キルギス人の帽子をかぶることを約束したユーラシアクラブの望月照夫さんらと富山駅で出会い、高速道路で新潟県へ向った。彼の随意と中央アジアのキルギスタンなどに関する体験話に、私は初対面の未熟が消え去り、三年間も帰っていない新疆故郷への思いが浮かび上がった。

柏崎町を経由して午後一時半ごろに小出郷文化会館に着き、二時ごろに交流会は留学生によりモンゴル

やウイグルの伝統歌舞から始まり、日本の伝統的太鼓と踊りでクライマックスに達した。あまり踊れないが踊りの輪に入り太鼓のリズムに陶酔する私を、肩に乗せた三歳未満の息子は止まらせなかった。なぜか分からないが、雷のような太鼓の音に私はしばしばある種の感動と沈静を感じる。

夕方六時頃に交流会が幕を下ろし、私たち家族全員は湯之谷村の佐藤京子さんのお宅にホームステイさせていただくことになった。富山の自動車学校に通うときに新潟県境まで高速道路を走ったことを除けば、私は初めて新潟県に来ることになる。新潟県に関して知っていることは「コシヒカリ米」と元総理大臣田中角栄の故郷であることだけだったが、佐藤さんの来るまでお宅に行く途中に私は「田中角栄」を「田中邦衛」と言ってしまった。日本に来て五年が経つがこれが初めて参加するこういう交流会とホームステイ体験であるにもかかわらず、当然あるはずの不安感は奇妙に長い間訪れなかった親戚の家に来たような心情に取り替えられた。ペットの猫「ブンちゃん」とお互いの警戒から仲良くなって、あまり動物とこんなに近く接触しなかった息子はその遊びに夢中だったためなのか、家に帰って来てからテレビなどで猫を見たら「ブンちゃん」と呼ぶ。

子供がいるからと夜中の不便さまで周到に考慮して、佐藤さんは廊下の電気をつけたままにしていた。家を出たら眠れないのにいつも悩む私はその夜にすっかり寝てしまった。翌日の朝、佐藤さんに呼ばれて起きて、豊富な朝食が既に用意されていた。たとえ今日は一人息子の父親になっていても、中学校の寄宿生活から二十年間あまり実家離れの日々を送ってきた私は、もはや記憶から薄れていた子供のころの家での暮らしを、長い時間に黙々と追憶し続けた。

朝十時半頃に私たちは六日町駅まで送っていただいてJR電車で富山に戻る道へ出た。「民族の十字路」とも言われるシルクロードの新疆ウイグル自治区に、ウイグル族、漢族をはじめに数十の民族を数え、その中に「達斡爾(ダフル)族」

という人口わずか五千人余りの少数民族出身の私は、当然生まれた日からも日常的に不同言語と習俗をもつ多民族往来の文化に染められて成長し、「国際化」をある意味で政治を越える不同民族間の文化接触、時にはその個人間の感動、出会いでもあるかもしれないと理解する。

「国際化」が進められる日本においてそれは時に「欧米化」に置き換えられる場合もあると実感する。同ように異国で頑張っている留学生といっても、特に経済的に近代化を先導してきた欧米各国からの余裕を持つ留学生たちが多様な交流会に参加する時刻に、生活と勉強の費用を稼ぐために、多くの貧しい第三世界からの留学生たちはいろいろな業種でアルバイトしている。それは自ら選んだ人生の道であるのは言うまでもないが、まずそういう自身の状況のため事実的に彼らは日本社会の競争現実を深く感じる反面、自由に日本人と付き合い交流し日本の伝統文化を丹念に味わう機会を余り恵まれない。

そこで、広い第三世界の発展途上国の人情・伝統とそして未来への憧憬などを理解してもらうための国際社会の窓口として日本のことを考えるが、私たちにとってその窓口を広く開いて日本の文化を肌で体験する貴重な機会を与えたこの交流会と、家まで暖かく迎え入れたホームステイの家族の方々に、心からの謝意を表したいと同時に、ユーラシアンクラブと日本シルクロード倶楽部など団体組織及び小出郷の意義深い試みと活動に敬意を持っている。そしてこの謝意と敬意がこれから自分の人生の道できっと貴重な励みになることを確信している。

小出郷での出会いは、自分の人生の中で時間的にごく短いかもしれない。ところが、異国で毎日勉学と生存という二つの道に奔走する発展途上国からの留学生として、その感想を単なる「楽しかった」という言葉では表現できない。むしろ、その意義は派手ではなく重厚な太鼓の音のように、良く伝わっていくだろうと理解したい。

## 留学生をホームステイで受け入れて考えたこと：住安 昭十郎/北魚沼郡湯之谷村

私は最初の年からフェスティバルに参加し交流をして来た者ですが、三年目にはじめて本気に交流し、ユーラシアについて考えることが出来ました。今回のフェスティバルについて、今までの経過やいきさつ、係わり方を小出郷文化会館の「友の会」

の立場で話し合う機会を持つことが出来たからでした。

ユーラシアは、私たちにとって、いつも遠い存在でした。

大陸についていいかげんな知識と理解しかなく、また深くかかわろうとはしていませんでした。日本と中央アジア大陸の諸国とは、昔からの係わりは大きいはずでしたのに島国根性というか広い視野での共通した人の生活のすべての営みに目を向けることなく、ただうる覚えの理解をし、分かったふりをしてきました。大切なことを見過ぎていたのです。

三年目になってユーラシアンクラブの大野氏をはじめ、多くの方々の真剣な活動をみたりきいたりして、初めて気づかされたという状態でした。

確かにユーラシア大陸と日本は色々な面での違いはありますが、同時にまた共通した面もありました。民族音楽芸能、歌や踊り、楽器の演奏上の表現などは似ているし、分かり合えるものが多い。

「すばらしい、感動する」など心に触れる共通性がありました。

今回のフェスティバルを通して学んだことは多くありました。お互いの民族を大事にしかもお互いの民族を尊敬し、いたわりあって生きていこうとするというユーラシアの人々の大きな心に触れることが出来、気づかされました。お互いを認め合い、それぞれの民族のよさを意識し、誇りを持って生きていられる寛容さは、日本人には弱いと思います。ユーラシア大陸に生きる民族人のすばらしさだと思います。

ホームステイとして短い生活でしたが、少しも違

和感が無い留学生だからからかもしかかもしれませんが、学問に対して、文化に対して求めようとするひたむきさが伝わってくる。真剣に学んで自分を高めようとしている姿は好感がする。そして、アジアの故国に戻って民族のために役立ちたいと思う気持ち強い。もちろん自分の人生の幸せを求めての一面もあるが夢と希望が感じられたし、自分の国に対して誇りを持っていられる留学生。(この見方は我が日本人にして、また留学生にこの強いエネルギーは今の日本人にあるのかどうか気になっているからだろうか。)

私はホームステイをして、ぐっと相手を身近に感じた。人としての共生する大切さ、心のふれあいをいくつか感じた。運が良かったのか、2人の留学生は芸術家でした。馬頭琴奏者のブヘナサン、味のある歌声のバイラさん。我が家で数曲の演奏をサービスしていただき、私のピアノと一緒に歌い、心が和んだ、うれしかった、良かった。おかげさまですっかり打ち解け時を忘れ、話した。言葉は上手、片言の日本語も苦にならず、気持ちが通じていた。楽しいことでした。分かり合えるきっかけが出来、ホームステイもいいなーと思う。家の近くのSL公園で無邪気な少年に戻りSLで楽しんでいた。モンゴル人も人の子、私も人の子、世界は一つ、争いの無い人の世でありたい。お元気でいて欲しい。またの再会を楽しみに。ありがとうございました。

## <報告>キルギスのビシケク第一寄宿小中学校から礼状

7月6日、ビシケクの日本センター所長秘書を務め帰国した田中佳代子さんを介してビシケク第一寄宿小中学校長からユーラシアンクラブ宛に礼状と写真がが届きました。礼状はプレゼントした書籍とテレビ、ビデオデッキに対するものです。

書籍は昨年夏のキルギス旅行の際に持って行った国語教科書、童話、絵本、世界名作全集等、段ボール2箱分と、去年の秋にキルギス大統領アカーエフ氏が来日し、その帰国便で運んで貰った段ボール8箱分の国語教科書、童話、絵本、世界名作全集等です。隙間にキャンデーも詰めて。テレビとビデオデッキは今年の3月に留学を終え帰国したキルギス外務省派遣留学生リスベク氏に500ドルを託し、テレビとビデオデッキを購入して届けて貰ったものです。大統領専用機で運んで貰った本と、テレビ、ビデオデッキプレゼントについてはリスベク氏に大変お世話になりました。

尚、テレビとビデオデッキについては学校からの援助要請(リスベク氏を介して)に応えたものです。日本関連のビデオテープは日本センターにあるものをダビングして使うとのことです。写真は書籍とテレビ、ビデオデッキの贈呈式を撮ったものが4枚入っていました。

礼状には、日本から送られた書籍を基に日本語ライブラリーを設け、おかげで子供達の日本に対する関心が着実に増しているとあります。また、テレビとビデオデッキに対しては日本語教育に幅広い利用が出来、美しい国日本の文化や暮らしを子供達自身の目で見る事が出来ると感謝しています。以上で報告を終わります。

書籍を、またテレビ、ビデオデッキ代を提供して下さいました私の友人諸氏に心より厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。  
ノミスギノスギ

## ナナイの民族村 シカチアリャン村訪問

### ミシンの点検、クラブキャンプの運営方法協議で

クラブは、8年間にわたって交流を続けているアムール流域の先住民族ナナイの民族村シカチアリャン村を訪ねました。長年トラブル続きで、宙に浮いているクラブキャンプの管理運営の安定化と無職女性らが従事してきたキャンプ内の縫製活動再開のため日本から搬送した寄贈ミシンの点検が目的です。大野のほかクラブ運営総務の井口隆太郎さん、富山の会員でシカチアリャン村の女性3人をミシンの研修に受け入れた東林勉さん、留学生のホームステイ受け入れ等の交流をしている宮田浩行さん、群馬でユーラシアの理解促進のため活動する後藤康子さんの5人。村では、親しい村民の自宅にホームステイし、歓待されました。

クラブキャンプは、村外れにあり、大野が村の産業発展や交流の拠点として購入資金を提供し、現在は村民75人に分筆する形で、古い民族企業（現在は民族企業の資格を失った法人）の所有になっており、村民以外の第三者が私的に利用している。このため今回、ハバロフスク地方政府の斡旋で、所有権をいったん住民75人に返却する手続きすることで合意。さらに安定した管理運営の方法のために、話し合いが繰り返されました。日本側は、昨年秋に設立された新しい民族企業（村民だけで構成）に、所有権をさらに移転し、直接管理することを要請しましたが、新しい民族企業の財政、活動が不安定なため、分筆者75人の住民の代表でもある民族企業の代表ピョートルさんと元アエロフロントパイロットでクラブのハバロフスク在住会員ウザ・グリゴリー（ナナイ人）さんが現地の責任者になる管理会社（日本側との合弁）の設立を要請しました。精神的には、直接住民が責任をとることが長期的利益にかなうと考えましたが、実態的解決に動くことも必要と考え、管

理会社設立に同意しました。しかし、あくまでも住民の管理運営能力の向上を促すのが目的であり、今後も情報交換し、管理会社設立の方法などについて今後検討することとしています。

日経新聞を通して募集し搬送したミシンは現在、同村役場の管理下で保管されている。東林さんと後藤さん及び大野の3人は、文化クラブで一台一台、稼動状況を点検し、油を差して15台が利用できる状態にあることを確認。キャンプの正常化を待つ民族村の縫製産業育成に使用していくことにしました。

今回の訪問では、毎年同村の初等中等学校への文具支援を続けている静岡の杉山一道さんや昨年5月同村を訪問した木野保幸さんらが文房具を同校に届けました。またこの日、観光旅行でたまたま訪れた同村で子供たちの生き生きした芸能公演などに感動した相馬隆介さんが、ピアノやハーモニカ、サッカーボールを子供たちに届け、喜ばれました。同席した後藤さんがピアノやハーモニカを演奏しましたが、たまたま演目が、かつて同村で長期滞留した樋口実来さんが子供たちに教えた「チューリップ」「カエルの歌」だったためいっせいに子供たちの間から日本の歌の合唱が湧き、感動を与えました。翌日がロシアの「先住民族の日」となっており、地元テレビ局がシカチアリャン村の特集番組づくりにかけており、大野は「この村は発展すると信じていますか」とインタビューされ、「男性は、厳しい環境で夕方から翌朝までアムール漁労する暮らしを続けなかなか余裕を見出せる状態に無いが、女性たちは村の将来のためどうしたらよいか真剣に考え、努力している。女性たちを中心に協力をすれば未来は見出せる」と応えました。

## [短信]

- ・運営スタッフの井出君がユーラシア大紀行、留学生会議準備懇談会で報告
- ・大野代表：群馬県の中澤丈一県議に同行、ウズベキスタン視察（報告別記）

★クラブ改革スタート、ボランティア団体の活動見直し/年内一杯継続します  
会員の定義、範囲、活動の方法、規約及び方向性等を再検討します